

収量・品質の向上は苗立数の確保が必須！！

～は種前のほ場準備とは種機の調整がポイントです～

H29 年度目標

◎10a 当たり収量：250kg 以上

◎2 等級以上比率：50%以上

は種前・は種作業のポイント

- ①排水対策の徹底
- ②基肥＋石灰を必ず施用
- ③碎土率70%以上を確保（出芽・除草剤に影響）
- ④は種時期に応じたは種量の設定、は種深を確認
（機械の事前点検・調整を確実に実施）
- ⑤は種後速やかな除草剤使用・病害虫対策の実施

1 排水対策

～大豆は水に弱いので排水対策を徹底し、出芽・苗立を確保しよう！～

- ・周囲明渠、本暗渠に結びつけた弾丸暗渠を組み合わせ、排水効果を高める。
- ・降雨後は周囲明渠や排水路を点検し、確実に排水されるように適宜補修する。

排水口の
位置が高い

この状態だと

明渠が排水口に
つながってない

水が排水口へ
流れない！



2 施肥

～初期生育確保のために、基肥をしっかり施用しましょう！～

表1 基肥の目安(例)

	施用成分量(10a当たり)	資材名	施用量(10a当たり)
窒素	1.5～2.5kg	えちご上越 大豆肥料	20～30kg
リン酸	6.0～8.0kg		
加里	6.0～8.0kg		
pH	目標値：6.0～6.5	OM-28	80～100kg

- ・ 土壌の pH が低いと、養分吸収や根粒菌の働きが悪くなるので、土壌 pH が 6.0～6.5 となるように石灰を散布する (pH が不明の場合は、10 アール当たり 60～100kg 程度施用する)。

3 耕うん・碎土

～碎土率(2cm以下の土塊比率)70%以上が目標です！～

- ・ 耕うん後の雨によるは種作業の遅れや、土壌の過乾燥による苗立ち率低下を防止するため、耕うんからは種までの作業は連続して行う。(春先の荒耕起は絶対行わず、土が乾いたときに耕うんし畑づくりまで行うこと。)
- ・ 1回の耕うんで土が十分細かくなるようゆっくり丁寧に作業する。(1回目の耕起が粗いと、何度やっても碎土率は上がりません。)



苗立ち率低下



出芽苗立ち良好！

- 粘土質で水分が多く、碎土率の確保が難しいほ場での作業のポイント
 - ① 早めの排水対策を徹底し、ほ場を十分に乾かす。
 - ② 作業速度を落として、耕うんピッチを小さくする。
 - ③ アップカットロータリーを使用する。(細かい土が表層に多くなる。)

4 は種

～品種や時期に応じたは種量で、目標苗立ち数を確保しましょう！～

- ・は種の深さは表面から3～4cm程度とし、ほ場が乾燥気味の場合はやや深めにし、十分鎮圧する。土壌水分が高い場合はやや浅めとする。
- ・畝立は種は出芽が安定し、平まきより苗立ち数が多く過繁茂になりやすいため、は種量を1割程少なく調整する。
- ・また、畝の高さは10cmを目安とする。(畝が高すぎると培土時の土量が不足するので注意する。)
- ・は種後は畝間の溝を明渠につなぐ。
- ・必要は種量は目標苗立ち数と種子の大きさに応じて計算する。(大粒になるほど必要は種量は多くなります。)

表2 は種量の目安

品 種	は種時期	目標苗立ち数 (本/m ²)	は種密度の目安		10a 当たり 種子量の 目安
			うね幅	株 間 2粒まき	
エンレイ	5月25日～ 6月10日	9～10	75cm	21～23cm	3.5～4kg
	6月11日～ 6月20日	13～18	75cm	12～16cm	5～6kg
里のほほえみ	6月1日～ 6月15日	13	75cm	16cm	6kg

※苗立率は80%として計算。

5 雑草対策

～は種後の速やかな除草剤使用で雑草発生を抑えましょう！～

- ・除草剤は雑草が発芽すると効果が劣るので、は種後なるべく早い時期の土壌が湿っている状態で散布する。
- ・乳剤の場合は、土壌が過湿状態でない限り、使用基準の範囲内で希釈水量を多くし、十分な量を散布する。
- ・アサガオ類は体系防除を実施する。(除草剤と手取り除草の組合せ)

6 病虫害対策 ～紫斑病・アブラムシ類を寄せ付けない！～

- ・紫斑病予防のため、塗抹または湿粉衣による種子消毒を必ず実施する。
- ・アブラムシ類は、褐斑粒の原因となるウィルス病を伝播するので、種子塗抹または予防剤により必ず防除を実施する。

- 農薬を使用する際は、使用方法・注意事項等を必ず確認し、自己の責任において使用すること。
- 農薬散布時は、周辺への飛散、使用者自身の安全に十分注意すること。
- 農薬使用後は、防除歴を整理し、記録・保管すること。